

令和六年三月吉日初版作成

汝の信仰 汝を救えり

高嶋善三郎

目次

- 自分を救えるのは、自分自身以外にない・・・・・・・・・・3
- 見るものと見られるものが一つになる・・・・・・・・・・5
- 汝の信仰汝を救えり・・・・・・・・・・7

お願い

既作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ）090-3346-6619

（メールアドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

自分を救えるのは、自分自身以外にない

『白光誌』2021年4月号において「究極の真理をどう受け取るか」において五井先生から昌美先生に伝えられた「…最後にはつきり汝らに言い聞かせる、と五井先生は前置きされ、次のように語られた。究極、自らを救うのは、宇宙神でもない。五井先生でもない。守護霊守護神でもない。昌美でもない。自分を救えるのは、自分自身以外にない」があります。

私達は、自分を救ってもらったために、五井先生の元にきました。私達はごうしたらよいのでしょうか。というご質問をいただきました。

それについて回答を整理します。

五井先生のお言葉を理解するためには、まず真に救われるという意味を正しく理解することが不可欠です。

五井先生は、「現在現れている状態というのは、過去において人間の心の波の中にあつた状態が、今消えてゆくことによって現われて来ているので、そうした消えてゆく姿を捉えてどうのこうのと言っていること

は、ちょうど幻影をつかんで騒いでいるのと同じことなのである。そしてそのほか現在現れているのは、自分の過去に放った想念だけでなく、違った想い、神様を離れたこの世を亡ぼそうという波が自分に感応して来て、自分の行為になっているのである」と言われています。

このように幻想の世界は、肉体界と霊界の間を行き来する、苦界ともいふべき三界の輪廻転生の世界であり、私たちは、幾転生をかけて体験してきたのです。

『人間と真実の生き方』にある「真の救い」とは、永遠の生命への覚醒、別の言葉でいえば、このような幻想の世界から解脱し、自由自在心をもって光明世界に住することです。この世界は神界や霊界の上位をさし、貧老病死のない世界なのです。

さらに別の言葉で言えば、安心立命の境地になる、言い換えれば、神聖（本心）復活することなのです。

神聖の世界は、生き続ける生命である、即ち無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心で、愛深き心、美しく清らかな心、真をつぐみ心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世

界なのです。神聖（本心）の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していく。肉体意識がいかなる不安恐怖の感情に襲われても、動揺もなく、ただ喜びと感謝に包まれ、必要に応じ、無限なる叡智など無限あるすべてを現わし、満たす存在です。安心立命は、常に神聖（本心）と一つになっていることなのです。

そして、苦界ともいうべき三界の輪廻転生の世界から解脱し、永遠の生命へ覚醒するには、守護の神霊の力を借りるにしても、自分自身が解脱への決意をし、それを実現するための努力はしなければ、成就しないのです。

それはなぜかと言いますと、私達人間は、宇宙神の分身として、宇宙神からご自身が有している才能のすべてを人類に与えられ、かつ自由性と創造性を与えられているのです。従って人間が神のみ心から離れ、滅亡への道を行んでいたとしても、人類が自らの誤りを自覚し、神のみ心に沿った生き方をしない限り、また神々の救済を受け入れることを表明しない限り、神々は、関与はされないというより関与でき

ないのです。そのため、地球人類は過去幾度も滅亡しているといわれています。

そして、宇宙神は、新しい人類を創造されたことが、『時を超える聖伝説』（ホブ・フィックス三雅社発行）において、次のように記述されています。

（宇宙）神は、人類に自分が有している才能のすべてを与え、創造した。創造性と自由性を与えられたが、判断しないこと、すべての生命体に判断を下さないこと、すべての生命体や神の創造的活動や天使や神々をないがしろにしないという条件が存在したのである。しかしアトランティスは善悪の果実を味わってしまったと、あらゆる善良さは失われ、神の子供たちは無知なる者として墮落してしまった。規則や制限が、彼らの暮らしを支配しはじめ、一つの統合的生命体の真実が失われた。

そして神は、この解決策として、すべての全能なる知性と無限の叡智のすべてを使って、神のハートからもう一つの巨大な爆発が起こり、新たな種子が発生し、新しい生命体を創造されていた。これらの存在はあらゆる点で人間だが、神とのつながりは損なわれていなかった。

これらは、セントラル・サンの一部であり、あらゆる生命体と源を共にしていて、彼らは、そのことを忘れることはなかった。そして彼らは、あらゆる生命体と神の創造の原理に基づいた活動の維持に責任を負っている神々や天使を尊敬し、敬っていた。

神の創造の歴史において、さらに後になって、地球というパラダイスに定住する時がやってきた時、神はこれらの存在を母なる地球に送り、その安寧と慈悲を維持する手助けをさせた。そのため神はある場所を選んだ。そこは他の人類から干渉を受けないところだった。現在日本として知られる鞍馬山である。アトランティスの者たちに、自分たちの起源や神聖なる神の計画やすべての神々や天使たちとの調和の中にあるべき完全性を思い出させるため、ひそかにその存在（守護者）たちを、サナト・クマラ（地球のアセンションの総括責任者）とともに送り込んだのだ。

以上の内容を見てわかるとおり、神は今回のアセンション時に備えて、いろいろな準備をしてくださっていたことがわかります。

そして私達が日々行っている、消えてゆく姿で世界平和の祈りや地球感謝行、光明思想徹底行、神聖復活の印を組むことは、アセンシヨ

ンを成功させる原動力となっていることがわかります。

見るものと見られるものが一つになる

「真の救い」を体得するために取り組むべきことについて、あらためて見てみましょう。

人間と神の関係を知ることが、まず必要であり、『人間と真実の生き方』に相応していくことが不可欠です。その中心的解脱の方法として、「消えてゆく姿」と平和の祈りを組み合わせで示されているのです。

この「消えてゆく姿」という言葉だけでは、この解脱はできません。それは誰が消して下さるのかを知ることです。その方はあなたの守護霊守護神様。何が出てきても、自分にとって一番いい状態として出て来ているのだ、軽く出して下さるのだ、というように感謝して守護霊守護神さんと一体になって生きるということが大切だと言われているのです。

また世界平和の祈りは、この祈りをするところに必ず救世の大光明が輝き（天地をつなぐ光の柱が形成され）、自分が救われるとともに、

世界人類の光明化、大調和に絶大なる力を發揮すると言われており、守護靈守護神様とより一体になり、消えてゆく姿をより強力に消し去ることが出来るのです。

「消えてゆく姿」という言葉の奥には、永遠につながる善いもの本物の姿がはっきり存在していて、消えてゆくに従って、その本物の姿がはっきり現われて来るのであるという、真理を知らないと、そこに現われた不幸災難や、環境の悪さをしっかりとつかんでしまい、せっかく消したものを又つかんで放さぬことになり、二重の因縁として業生の層を厚くしてしまうのであると言われていました。

「消えてゆく姿」という言葉を使って、善人たちが少しの事や、過去になつてどうにもしようのないことで自分を責めているのを、すっばりと赦して下さるようとして、神様が五井先生を通して、世界平和の祈りと組合わせて、説かせて下さったものだと言われているのです。

人間の心というものは不思議なもので、見るものと見られるものとの二つあります。例えば恐怖する心こそを消えてゆく姿とみる心があ

るわけです。あらゆる想いを消えてゆく姿と眺め、世界平和の祈りに入れきっていると、見るものと見られるものが一つになり、自(おの)すからと自(み)ずか(ら)が一体になり、させられることとする

ことが一つになるのです。〔続如是我聞』22)〕

この心境を自由自在心といい、この心をもって光明世界に住する

ことになるのです。
見るものと見られるものとの二つが一つになるのは、業想念が光の中に消えてゆく時に起こる現象と言えます。また小生命である人間が大生命である神様を真っ直ぐ現わす時にも起こる現象とも言えます。

神様を一口に言えば、生命そのものであり、生命の基ということが出来る。この生命は、限り無い智慧、限り無い力、限り無い創造力をもっている。人間が小生命であるのに比べて、大生命とも呼ばれている。宇宙の在りとしあらゆるものは、この大生命の心のひびきによって存在しているのであって、この大生命の心のひびきの外にあるものは無い。そこで神様のことを絶対者ともいう。絶対者が陰陽に分かれて、数限りない存在者、存在物となり、絶対者自身の相(すがた)を、その存在者、存在物の中から仰ぎみよるようになるのです。

神様は一つであって多(おほ)く(人間)であり、多(おほ)く(小生命)を真っ直ぐに現わすことがなされるようになって、神の働きが多なる神の相(すがた)

がた」とがはっきりわかってへると言われています。

汝の信仰汝を救えり

神々といかに一体になっていくかが重要になりますが、私達が神とスムーズに一体になっていく上で、大きな示唆を与えてくれるお言葉を紹介します。

それは、『神への郷愁』の中「愛情の反応」項目にあります。

その中で五井先生「夫妻に飼われていた愛犬との愛情の交換を通して、人間同志の間の愛情の反応にも触れられ、その違いを言及され、そして神と私達の愛情の交換に触られています。

「人間と神様との間における、こうした問題を取り上げてみよう。

神様ははたしてどちらの部類の態度を示されることであろうか。

神様は人間の（単純素直な態度でない）それではなくして、むしろ動物の示す態度で、人間にお答えになるのである。人間は自己が示した愛情だけを神様からかえされるのである。

ただ動物のように、尾を振り舐めしゃぶるような反応は示されず、神を愛する人間自身の心の中に生活の中に、自ずからなる返礼をなす

ってくださるのである。

人間が神へ示す愛情は、そのまま信と呼ばれる態度になる。その信への返礼は、神のみ心、神のみ光、神のみ力のその人間への交流となって現れ、その人間は自ら神の子としての安らぎと、権能とを知らぬうちに与えられてゆくのである。

私は神を愛し、信じ、そして神への全託の生活に突入した。そして、神のみ心、神のみ光、神のみ智慧を、私に集まって来る人々に伝えることができるようになった。私は神のみ働きの器となり、同時に人間の姿を映す鏡となった。

私は私を通して神への真に進む人々をしないで多く磨きあげることができるようになった。

私は私を通り道として神を信じてくれる人の心が、そのまま神の返礼としてその人に光明となって還ってゆくのを日々みつめながら、

「汝の信仰汝を救えり」というイエスの言葉が真理であることを確認し、日々神の大愛に感謝し、信仰熱き人々のその愛情をそのまま、その人々への愛情と示しているのである。」

神を愛し、信じ、そして神への全託することは、いかに楽しく、ありがたいかを実感できるお言葉です。